

発行：令和元年8月1日
 (株)三協技術 企画管理部
 仙台市青葉区国分町 3-8-14
 TEL：022-224-5503

・郷土愛と文化財

・調査室トピック 天童市礼井戸遺跡・高掬東遺跡出土の柱材

・陸奥国分寺出土瓦にみる震災復興

・史跡陸奥国分寺・国分尼寺跡ガイダンス施設と

ボランティアの活動

・今、東北の歴史を伝えたい...



～大地の声を読む～



郷土愛と文化財

株式会社 三協技術 技術顧問 文化財担当

佐々木 洋治

東北の繁栄と人びとの生き方について思索するとき

輝かしい郷土の発展は 漠然と未来にあるのではなく

過去に積み上げられた限りない知恵と技術を認識することに、その『鍵』がある。

『郷土』とは生まれ育った土地を差し、郷土を用いた複合語に「郷土史」、「郷土芸能」、「郷土玩具」、またその土地の自然環境の中で作られた食材をもとに伝承されてきた「郷土料理」などがあります。また、『郷土』を言い換えると『ふるさと』を意味し、最近では「ふるさと納税」や「ふるさとの文化財」、「ふるさとの自然」などが各市町村によって大いに宣伝されています。

このような『郷土』や『ふるさと』という言葉の響きに、歴史や自然豊かな情景を思い浮かべる方も多いことでしょう。そもそも「郷」という字は古代律令時代の区画の一つで郡内の一地域をさす言葉でしたが、今では「むらさと」などの田舎を意味します。たとえ田舎で生まれ育っていないとしても、郷土という言葉に自然豊かな何やらあたたかなイメージが自然に湧いてくるのは、我々日本人の遺伝子に刷り込まれているからでしょうか。

その一方で、田舎の対局に位置する言葉が「都会」といえます。かつて集団就職の時代には、農村部から多数の若者が都市部へと流れ込み、それが高度経済成長期を支えた大きな原動力となりました。東京オリンピック開催以前は東北から東京に出るのに夜行列車が定番でしたが、今では新幹線によって仙台－東京間が約1時間半、新青森－東京間でも約3時間で結ばれて日帰りも可能となり大変便利になりました。しかし、このような目覚ましい交通機関の発達の一一方で、今でも若人はストロウで吸い上げられるように都市部へと流出し続けており、人口の一極集中がとまらず地方の少子高齢化や過疎化にともない町村が限界集落になるなど社会問題があきらかとなっています。さらに農村部では、田地田畑の不耕地が増え害虫や害獣がはびこり荒野と化すなど、かつての里山の風景は大きく変容している現状があります。

先行きが暗くなったので私ごとで恐縮ですが一服のつもりで話題を変えてみたいと思います。私は、太平洋戦争が開戦した昭和16(1941)年に満州で生を受け、終戦後は父の実家のある山形県高島町に身を寄せて幼少期を過ごしました。思い起こせば昭和20年後半は、日本もようやく戦後から立ち直って国民にも笑顔が戻り、日本経済は少しずつ右肩上がりの兆しが見えた時期でもありました。そんな中、当時の私には、娯楽やそう変わった遊びもある訳でもなかったもので、もっぱら自然を相手に時間を過ごすのが常でありました。幸いにも近くに年配の郷土史家、土器・石器の蒐集者や植物採集者、民具・民話の研究者などがおられ、この方々よりお話しを伺うなどして多くの知識を教示していただきました。特に私は土器や石器に興味があり、それらを手に取ることで昔の人たちの息吹が感じ取られるようで彼らの生活を想像するのが何よりも好きでした。よく言われる『考古ボウイ』として目覚めたのは小学4年生の頃です。

こうした中、昭和30(1955)年から山形県高島町の日向洞窟遺跡の発掘調査が昭和33(1958)年まで3次にわたり実施されました。3次調査では東京大学の鈴木尚先生(人類学)・山内清男(考古学)の両先生が発掘調査に参加され、私の採集した土器・石器などを拙宅にて見ていただく機会を得ました。この時が両先生との初対面であり、この出逢いが私の人生を大きく変えることにもなりました。その後、日向洞窟近くの一ノ沢岩陰遺跡・神立洞窟遺跡などの現地を案内し、山内先生からは高等学校卒業後について「東京に出てくるのであれば、私のところ(東京大学理学部3階山内清男考古学研究室)へ訪ねてきなさい。」と仰っていただきました。

こうして昭和 35 (1960) 年 4 月、西も東もわからない山形の山猿が山内清男考古学研究室の門戸をたたくこととなった訳ですが、特に最初の 2 年間は学問というより箸の上げ下げからお茶の出し方や接遇にいたるまで教育を受けました。中でも特に思い出深い先生との約束があります。それは『女性との交際は禁止』、『昼飯は食わなくても死にはしないのだから、それだけのお金があるのであれば本を買いなさい』、『1 週間に 1 日は研究室に来ること』の 3 つでした。今の感覚からすれば少し乱暴な物言いの感もありましょうが、私には別にそれほど苦になりませんでしたし、このおかげでたくさんの書物に出会うことができました。

山内先生は、東京大学を定年退職後に成城大学へ移られました。その後も毎週先生の研究室を訪ねました。山内先生との会話は、学問的なもの以外にごくありふれた内容も多く、特に心に残るのは『縄文人たちは、雪の日はどうしてたんですかね、風邪を引いたときはどうしたのかな、骨折したときはさぞ痛かったらうに…お腹が痛くなったら泣いたんですかね』等々。今にして思えばそのような事柄も真剣に考えておられたようです。縄文時代はもとより『日本考古学の父』とも言われる先生の学問の根底に、このようなお考えがあったように思われます。私も先生の教えを受け継いで自分なりに『感性考古学』と呼んでおります。

また、山内研究室には諸大学の先生方をはじめ各地域の研究者が訪ねて来られ、その都度紹介していただきました。中でも佐原 真さんとの出会いは私にとって心の支えとなりました。佐原さんは、東北に来られた時には拙宅に立ち寄り一泊していくのが習慣になっておりました。酒は一滴もすることがなく、好物は私の妻手作りの焼きおにぎりをほうばりながら夜の更けるのも忘れて議論というか言いたいことを互いに自由に話し合いました。その時は、当時世間を賑わせていた三内丸山遺跡の高い塔はどう考えるか、人口は何人か等々…話題はつきることがありませんでした。特に春分・秋分・夏至・冬至を木柱と結びつける考え方に対しては疑問を持っていて、「私は、ツバメや白鳥が渡ってきたときが春や冬であり、これらは地理的条件によって皆違おうと思います。サケ・マスが大海原



日向洞窟遺跡 (ひなたどうくつ)

山形県東置賜郡高島町に所在し、縄文時代草創期の標識遺跡として著名。山内清男が始原縄文の土器を出す遺跡として注目したことで、縄文土器の始原問題に対して新たな局面を打開した遺跡として特記され、豊富な遺物内容は当時の草創期研究を大きく推進させた。近くには同じく国指定史跡の大立洞窟、火箱岩洞窟、一の沢洞窟がある。

から遡上してきた日はお祝と祭りだったことでしょう。」とお話しておられました。山内先生と同じまなざしをもっておられたように思います。そして就寝間際に佐原さん最後に曰く、「私たちは山内先生の門下生で兄弟弟子ですね」と。お休みの言葉の代わりに、有難いお言葉をいただいたことが忘れられません。

さて、少々道草を食いすぎてしまいましたが、本論に入る前に考えてみたい 2 つのことがあります。1 つ目は誰もが知る童謡『七つの子』の歌詞です。「カラス～なぜなくの～カラスは山に～かわいい七つの～子があるからよ～」というものです。何気なく歌っておられたと思いますが、よく考えてみてください。実はカラスの抱卵は 3～5 個で 7 個産むことはありません。もし仮に 7 個抱卵したとすれば巣が大きくならなければならず、親鳥は餌の供給がさらに大変な仕事になるでしょう。そして 2 つ目は、今ではほとんど見かけなくなりましたが、小学校等にあった二宮金次郎の銅像 (石像) です。誰しも背中に薪を背負い、歩きながら本を読んでいる姿を思い浮かべることでしょう。しかし彼がこの時何の本を読んでいるのかと聞かれたら答えられるでしょうか。答えは「修身・齐家・平天下」を説く『大学』という本です。

山内清男 (やまのうち すがお)

1902～1970。東京府 (現東京都) 生まれ。日本の考古学史上、最も功績のあった考古学者の一人。東北帝国大学医学部解剖学教室助手・東京帝国理学部人類学教室講師・成城大学教授を歴任。文学博士。型式学的研究法と層位学的研究法を応用して縄文土器の全国的な編年網を作り上げた。また、縄文土器の表面に施されることの多い「縄文」について、紙綴りで様々な紐を作り粘土に転がしたり押し当てて「縄文本体」をはじめて解明した。

佐原 真 (さはら まこと)

1932～2002。大阪府生まれ。大阪外国語大学ドイツ語学科を経て、京都大学大学院博士課程修了。奈良国立文化財研究所勤務の後、国立歴史民俗博物館館長を歴任。弥生時代を中心とした研究以外に日本人の起源から衣食住まで研究範囲は幅広い。外国の先史例・民族例などを利用するほか、たとえ話をういたりして分かりやすく面白い考古学を提唱し、考古学の普及啓発を積極的に行った。

このように2つの例はいずれも考えたこともない、というのが多い答えではないでしょうか。要するに意識するまで気にもとめなかったことなのです。しかし、このように視点を変えれば今まで見えなかったものに気付くことができるかもしれません。現在、少子高齢化が進むなか「地方分権一括法」俗に言う平成の大合併により、全国にある約3200の市町村は約1700あまりになりました。行財政の効率化と謳われた裏でそれに伴う文化財の再編と見直しも進んでいます。マスメディアやインターネットの普及の影響もあり、特に若者の都市部へ志向性は今なお高いまです。地方でも大型量販店や外食チェーン店が幹線道路沿いに並び、望むならどこでも同じ物が手に入り暮らしが便利になったとも言えますが、言い換えればどこも同じような景色になっているとも言えます。郷土に対する認識は人それぞれですが『ふるさと志向』は薄くなって来ているのが現実ではないでしょうか。ヒトはどこから来てどこへ向かおうとしているのかアイデンティティが失われつつあります。

しかし、先ほどの例と同じように普段生活している身近な周りの環境について改めて視点を変えてみると、地域ごとに特色ある歴史や文化があります。元来、日本人は生きるために海や山・川の自然を相手にし、その土地その土地で生きていくため長い年月をかけて様々な知恵と工夫を凝らして技術を育んできました。山では山の、海では海のそれぞれの土地に暮らす文化がありました。その暮らしを支えた道具や、宗教や信仰、儀礼や祭祀も今に伝えられています。暮らしの利便性が向上することでこれらの地域的特色は古いものとして次第に忘れ去られようともしています。

普段の生活で意識することはないと思いますが、人は誰も太古の昔から命を繋いで現在に生きています。ご自分の祖先を江戸時代まで辿れる人もおられるでしょうが、それよりはるか昔の縄文時代にも確実に私たちの祖先は存在していました。こう考えると地域に残る文化は、まぎれもなく今生きている私たちの遠い先祖の生きた証ともいえるでしょう。これらは歴史的伝統文化に育まれた地域の貴重な財産とも言えることができます。自分たちの足もとにある特色ある文化を理解して誇りに思えたなら、生まれ育った場所または住んでいる土地に興味をもち愛着をもつ人が増え、地域が活性化されるきっかけにもなることでしょう。東北地方には自然とともに人びとが暮らし豊かな知恵と技術に育まれた地域文化があります。そして、その郷土に活力をもたらす鍵の一つが文化財にあると私は信じています。

『文化財』とは、人類の文化的活動によって生み出された様々な事象のことで、言い換えれば文化的財産とも言えます。昭和25(1950)年に有形文化財・無形文化財・民俗文化財・記念物・伝統的建造物群を対象に『文化財保護法』が制定されました。文化財保護法の第1条に文化財を保存し、且つ、その活用を図り、もって国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的とする、とあります。この法律が制定されたことにより多くの文化財が守られてきたのです。そして平成30(2018)年7月1日に新たに歴史的建造物や史跡、美術品など地域の文化財の活用を後押しする改正文化財保護法が可決されました。市町村の教育委員会が保存活用計画を作り国が認定すれば、市町村の判断で一般公開や軽微な現状変更ができるようになります。文化財の保護にとどまらず活用面に重きをおき、観光や地域振興を図るのがねらいです。薄れかけていた郷土、即ちふるさとを改めて見直す契機になります。

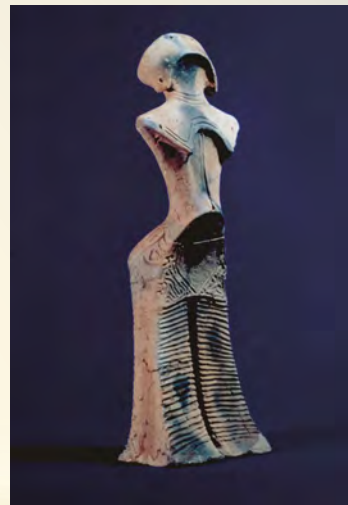
文化財にもいろいろな種類があることに触れましたが、この中で有形文化財に属する埋蔵文化財とは地中に埋まった遺跡(遺構・遺物)のことを指します。例えば多くの人に対して知っている遺跡の名前を問いただけると「三内丸山遺跡」や「吉野ヶ里遺跡」などの教科書に載っている有名な遺跡を答える人が多いのではないのでしょうか。でも実際には私たちの身近な場所にもあまり知られていないだけで遺跡は多く存在しています。人の活動した痕跡がいわば遺跡ですから、まさに地域を語る生きた歴史でもあるのです。ただし、遺跡は通常土の中に埋まっているため見ることはできませんが、発掘調査を行うことによって豊富な情報を得ることができます。ですが同時に一度壊してしまえばもどくにはできないというリスクが伴います。したがって調査を行う際には細心の注意を払って仮説・検証を繰り返していくことは、遺跡に対して向き合う際の当然の心構です。

文化遺産はなぜ保存しなければならないのか。遺跡をとおして私たちは歴史を学ぶと同時に、それをとりまく自然環境や歴史的環境を総合した生活環境をも考えることができます。即ち文化遺産を守ることは歴史的環境の保護であり、とりまなおさず生活環境の保護にもつながるのです。近年、環境汚染、温暖化問題、生態系の破壊、戦争と暴力、エネルギー問題など問題が山積みですが、これらの社会問題も当時の暮らしを考えることで解決の糸口がつかめるかもしれません。文化財をとおして郷土を見つめなおすことは、我々のルーツや今後の生き方を考えるきっかけにもなることでしょう。

最後に、遠いご先祖である縄文人の心に想いを馳せ、時間と空間の中を散歩してみます。

縄文人の社会は、農業経済以前の狩猟採集経済の社会であり、生きるために自分の責任で食料を確保しなければなりません。今まで食しなかったモノが、土器の発明により煮炊きすることでレシピのレパートリーが格段に増加していきました。また、団子状・クッキー状といった加工食品も考案されました。その結果、縄文時代中期までに人口の増加がみられ、最も多いときで約28万人という数字でもっています。しかし、縄文人の寿命は、残された人骨から平均値で30歳をわずかに越す程度とされ、乳幼児の死亡率が圧倒的に高かったこともわかっています。住まいは、自然の洞窟・岩陰の空間を利用したり、ムラの共同作業で建てた竪穴住居や掘立柱建物などに住んでいました。家族の構成は4～5人程度で5家族前後で集落を形成していたと考えられています。規模の大きい集落では、中央に広場を配置しその周辺に20家族ぐらいで構成されていたと考えられますが、時期や地理的環境によって大きな違いもありました。

縄文人の気持ちになりかわって空想すると、常に自然を相手にしての生活は危険なことが多くあったでしょうし、健康状態は言うに及ばず、骨折や擦り傷などは日常茶飯事のこと、病気などの時には肉体的苦痛はさぞ大変だったことなのでしょう。このようなときには薬草・キノコなどの覚醒成分を塗布・吸引服用したと思われるのですが、これらのことは野生動物の行動等から学習したのでありましょうか。



めがみ
縄文の女神

平成10年(1998年)に山形県舟形町西ノ前遺跡より出土した縄文時代中期(4000年前)の土偶。大きさは日本国内では最大級の45cm。平成23(2012)年に国宝に指定されている。顔の表現や手足等はデフォルメされ、全体のバランスもまるで現代アートの様でもある。イギリスやドイツなど海外でも展示され、その造形は評価が高い。山形県を代表する文化財の一つでもあり、舟形町のゆるキャラである『めがみちゃん』は、町おこしや地域のPR活動を行っている。(写真撮影：佐々木洋治)

特に人の生死に対しては、自然の脅威と恵みから生まれる自然観・宇宙観や夢・魂・信仰などから「心」というモノをいつの時代でも人間である以上等しく認識していたと思われま。縄文人の傑作「土偶」はまさに「心の形」そのものなのです。

21世紀の今、縄文人と語ることは不可能ですが、遺された文化遺産から彼らに学ぶことは大いにあります。

輝かしい郷土の発展は、漠然と未来にあるのではなく、過去に積み上げられた限りない知恵と技術の中にこそあるのではないのでしょうか。東北の繁栄と人びとの生きかたについて思索する『鍵』は正にそこにあるでしょう。

【調査室トピック】天童市 礼井戸遺跡・高掬東遺跡から出土した柱材

山形県天童市において市道清池南小畑線の道路工事に伴い大字清池字石名田内に所在する礼井戸遺跡・高掬東遺跡の発掘調査を三協技術が行った(2,950㎡)。

本調査では、縄文時代および古代、中・近世の遺構と遺物が発見された。縄文時代の遺構は、低湿地部を除く北区全域と南区の北側に分布し、土坑19基、ピット(小穴)122基、埋設土器4基、性格不明遺構63基を確認した。また、調査区の南側では焼土を伴う遺物包含層と小河川が検出され、縄文土器がまとめて出土している。ここでは、ピット(小穴)について詳しくみてみたい。

ピット(小穴)は、北区を中心に多数検出されたものの、配列に規則性がみられず建物を構成するか不明であるが、この中の6基から柱材が出土している。木材等の有機質のものは、長い年月の間に分解され消滅してしまうことが多いが、今回は地下水位が高く、水に長く浸り空気が遮断されていたことから残存していた。柱材を観察すると、いずれも先端部は石斧等により平坦に加工さ

れ、端部が炭化していることから意図的に焼き入れすることで防腐処理をしたものと推測される。

縄文時代の低地や水辺の遺構で木材が出土する場合、その多くは打ち込みを目的とした先端が尖った杭状の形態をとるものが多いが、このように柱材として出土した例は少なく貴重な事例といえる。また、この柱の樹種同定をしたところ全てクリ材で、うち1本を年代測定した結果、3270±30yrBP(縄文時代後期中葉～後葉)との結果も出た。

今回の調査区では住居跡等の居住に関わる遺構は検出されていないため、火の使用を伴う捨て場(遺物包含層)の存在から居住域からやや離れた小河川沿いで行われた祭祀の場として利用されていた状況が想定される。この場合、創造をたくましくすれば出土した柱はトーテムポールのような役割をはたしていたのかもしれない。(佐々木 竜郎)

〈引用参考文献〉

天童市・三協技術 2017『天童市礼井戸遺跡・天童市高掬東遺跡』

陸奥国分寺出土瓦に見る

震災復興

技術顧問 文化財担当

渡邊 泰伸

陸奥国分寺跡は、宮城県仙台市若林区木ノ下に所在する。仙台市街の中心部からは南東へ2.5kmほどの市街地の広がる段丘東端に広がる宮城野原の一角に位置する。現在の陸奥国分寺の寺院は、もともと陸奥国分寺の別当坊で、創建当時の陸奥国分寺は現在の陸奥国分寺の東隣の地区にあった。

国分寺とは仏教による国家の安寧(鎮護国家)を意図する聖武天皇によって全国に造られた官寺である。天平13(741)年に国分寺建立の詔が出されると、国分寺は律令国ごとに建立され、陸奥国では8世紀中頃に造られたと考えられている。全国の国分寺と国府の位置関係を見ると、両者の距離は4km以内におさまることが多いが、陸奥国分寺の場合は、国府である多賀城と10kmも離れるという特徴がみられる。

文献によれば平安時代の貞観11(869)年に大地震、承平4(934)年に雷火による七重塔焼失と二度の天災に遭い、その後衰退していったが、江戸時代には伊達政宗の庇護のもと薬師堂と仁王門が再建された。現在、この薬師堂は国の有形重要文化財、仁王門は宮城県指定有形文化財に指定されている。しかし、明治時代になると僧坊のほとんどが廃絶し、現在は陸奥国分寺跡地に隣接する別当坊が陸奥国分寺の名を受け継いでいる。

陸奥国分寺跡の本格的な発掘調査は昭和30～34(1955～1959)年に宮城県教育委員会、仙台市、河北文化事業団、陸奥国分寺によって実施され、昭和47(1972)年以降は仙台市教育委員会によって継続的に調査が行われている。調査の結果、寺院は東西800尺、南北800尺以上の築地塀で囲まれ、伽藍中心軸上に南大門、中門、金堂、講堂、東西僧坊が配置され、金堂の東側に鐘楼、七重塔、西側に経蔵が並ぶ大伽藍であったことが判明した。出土遺物は多量の瓦、須恵器、土師器のほか、塔の擦管などの金属製品もある。

これらの遺物の時期であるが、寺院のような各時期が重複する遺跡の場合、時期特定は極めて難しい。まず出土瓦を分類して軒瓦の数的な分析と層位的な位置関係から相対編年を考える。そして軒瓦の組合せは瓦窯跡の出土事例から共伴関係を考え、製作技法や共伴土器も検討する必要がある。







陸奥国分寺跡では、軒丸瓦で9種24類、軒平瓦で10種20類程が出土している。軒丸瓦では重弁蓮華文系と宝相華文系の出土例が多く、軒平瓦では偏行唐草文と連珠文系が多く、組合せは重弁蓮華文軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦のセット(A)、宝相華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦もしくは齒車文軒丸瓦がセット(B)となる。

塔跡と塔回廊跡の層位は、創建時の塔基壇のまわりに整地層、次ぎに灰白火山灰層、その上に焼土層が堆積している。灰白火山灰層は10世紀第1四半期の延喜15(915)年に降下した十和田aの可能性があり、整地層はそれ以前の9世紀後半に整地されたと考えられ、貞観11(869)年の地震後の整地層の可能性もある。焼土層は承平4(934)年の雷火による塔焼失の際のものと考えられる。

出土層位の状況から、前者は陸奥国分寺創建時の瓦、後者は貞観大震災後の再建時の瓦だと考えられる。連珠文軒平瓦は延暦21(802)年に造営された胆沢城にも使用されており、陸奥国分寺復興にあたり陸奥国の造瓦ラインで供給された瓦を国分寺の再建に使ったことがわかる。

また、工藤雅樹氏は宝相華文について、統一新羅や太宰府安楽寺に類例があり、『日本三大実録』貞観11(869)年五月二六日条に新羅海賊事件に関わった新羅人を陸奥の国に移配し造瓦に従事させていた記事があることから、渡来人によってこの文様がもたらされたとしている。しかし、仙台市神明社窯跡C地点から陸奥国分寺出土のものより古い様式と考えられる宝相華文軒丸瓦が出土したため、国分寺再建の際、新たに採用された瓦文様ではないことが指摘されている。これなどは、『日本三大実録』の内容からみて陸奥国分寺の再建に、陸奥国内だけでなく日本国を挙げて大規模な支援が行われていたと理解することを可能とするのではないかと。

平成23(2011)年3月11日に発生した東日本大震災は未曾有の被害をもたらした。大震災の復興には様々な国や地域からの物心にわたる支援も大きな力となった。陸奥国分寺から出土する瓦は、国をあげて復興に進む姿勢が古代から変わらないことを今に伝えている。

	軒丸瓦	軒平瓦
安養寺下瓦窯跡		
	重弁蓮華文軒丸瓦	偏行唐草文軒平瓦
神明社窯跡C地点		
	宝相華文軒丸瓦	均整唐草文軒平瓦
堤町窯跡B地点		
	宝相華文軒丸瓦	連珠文軒平瓦

<引用参考文献>
伊東信雄ほか1961『陸奥国分寺発掘調査報告書』河北文化事業団
工藤雅樹1965『陸奥国出土の宝相華文瓦の製作年代について』『歴史考古13』



- ①史跡陸奥国分寺・尼寺跡ガイダンス施設のシンボル「天平廻廊」の外観。平成29年度には天平廻廊を題材とした写真コンテストが行われた。
- ②ガイダンス施設内部の様子。陸奥国分寺だけでなく陸奥国府である多賀城や、国分寺で葺かれた瓦を生産した窯跡などを紹介する。また、休憩スペースや作業・学習室があり、歴史学習のために利用することもできる。
- ③お薬師さんの手づくり市の様子。境内一面に店が広がり、多い時は1万人～8千人が来場する。プロ・アマを問わず出店が可能で、工芸品や雑貨だけでなく食品なども販売しており、仙台市外からの出店も見られる。



史跡陸奥国分寺・尼寺跡ガイダンス施設とボランティアの活動

文化財調査室 佐々木 華子

平成29(2017)年7月、陸奥国分寺跡地内の南端に、地域の歴史・文化を親しみ、学び、体験するための施設である「史跡陸奥国分寺・尼寺跡ガイダンス施設」が開館した。ガイダンス施設北側に広がる国分寺跡地は、現在、芝生が茂る多目的広場になっており、発掘調査により存在が判明した築地塀を植栽で再現しているほか、施設の隣には休憩棟として中門と金堂を結んだ廻廊の一部が再現されている。『天平廻廊』と名付けられた廻廊は、鑊鉋^{やりがんな}を用いた伝統的な工法で柱など各部材の表面を仕上げ、屋根には陸奥国分寺の発掘調査で出土した瓦と同じ文様の瓦を葺くなど、荘厳であった当時の様子を再現している。また、朱で染められた柱は、通り沿いからもひととき目を引く地域のシンボリック役割も担っている。ガイダンス施設では、解説パネルと共に発掘調査で出土した瓦や須恵器などの遺物を見学することができるほか、『陸奥国分寺薬師堂ガイドボランティア会』のスタッフから詳しい解説を聞いたり、国分寺跡地のガイドを依頼することもできる。

この『陸奥国分寺薬師堂ガイドボランティア会』は、平成25(2013)年に設立された組織であるが、平成9(1997)年に仙台市教育委員会文化財課(以下、文化財課)が行った「文化財ガイドボランティア養成講座」の受講者のうち、有志12名で立ち上げたボランティア会が前身組織である。会設立当初は国分寺跡地周辺で独自にガイド活動を行っていたが、文化財課による「陸奥国分寺跡ガイド養成講座」や「お薬師さんの手づくり市」の資料展示コーナーでのガイドなどをきっかけにして、次第に文化財課との連携を深めていった。

「お薬師さんの手づくり市」は、毎月8日に国分寺跡地(現陸奥国分寺薬師堂境内)で史跡活用の一環として10年ほど前から開催されている。市の立つ日は文化財課職員とボランティア会のメンバーが一緒になり陸奥国分寺の解説やパンフレットを配布したりしており、ガイダンス施設開館後は、施設内の学習室で文化財課の一年間の活動(発

掘調査、文化財展、各種見学会)をまとめた映像を放映するなどして活動している。

この他にもボランティア会では地域とのつながりを深めるため、近隣の高校とのガイド提携を結んでいる。ガイドを行う高校生は文化財課による講座を受講し、陸奥国分寺や地域の歴史の理解を深めガイドに臨むことで、歴史を通じて地域社会とのつながりを学んでいる。

仙台市内には「仙台市博物館」や「地底の森ミュージアム」、「縄文の森広場」など様々な博物館や展示施設があり、ここでも施設ごとにガイドボランティア団体が存在し活動しているが、これ以外にも『文化財サポーター会』という組織がある。文化財課が行っている「文化財サポーター養成講座」の受講者のうち、講座終了後も歴史・文化財について学びたいという希望者により組織・運営され、自主的に勉強会や見学ツアーを開催して文化財への知識を深めている。また、文化財課主催の文化財展などのイベント時は、文化財課からの要請に応じて協力もおこなっている。文化財課はサポーター会へ一方的に協力を依頼するのではなく、サポーター会から出土品の勉強の場が欲しいなどの要望があれば講座や遺跡の見学会を設けるなどしており、文化財サポーター会と文化財課は協働関係にあるといえる。

このように、各ボランティアガイド団体も文化財サポーターも市民の文化財を学びたいという意識から生まれた団体である。市民の文化財への関心は非常に高く、積極的に地域の文化財に携わっている。このような市民の存在は文化財を活用していくうえで不可欠な存在であり、仙台市の文化財は郷土の歴史を愛する市民の下支えによって活かされているとも言えよう。

謝辞：本文をまとめるにあたり仙台市教育委員会文化財課をはじめ陸奥国分寺薬師堂ガイドボランティアの方々からご教示いただきました。末筆ではありますが御礼申し上げます。

今、東北の歴史を伝えたい...

平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、東北地方を中心とした広い範囲に大きな被害をもたらし、文化財についても建造物や美術工芸品、無形文化財、埋蔵文化財などに深刻な被害がでました。これらは現在も、国や自治体などで文化財の復旧・復興が進められています。沿岸部では、道路の新設や高台への集団移転に伴う宅地造成等により発掘調査が行われましたが、これまで開発がなく調査事例が乏しかった地域の調査事例として、考古学的にも貴重な発見がありました。また、同時に現地説明会等を通じて地域の人々にご理解をいただくことで身近にある生きた歴史として受け入れられています。

今回の震災では、過去の災害の実情を後世に残すために教訓として作られた石碑が沿岸部の各地に点在していることが見直され「自然災害伝承碑」の一つとして注目されました。文化財の指定以外であったものも地域の歴史を知る貴重な歴史遺産であることから登録文化財となる動きもみられます。また、遺跡の発掘調査現場で見つかる地震や津波、洪水等の痕跡をデータベース化することで、文化財のもつ情報を災害史や防災にも役立てようとしています。

このように文化財は、ただ古いというだけでなく様々な情報や可能性を秘めています。文化財保護法の改正により文化財を利活用することで観光や地域振興に役立てることが今後、期待されています。各地域には、それぞれの町を形成してきた歴史があり、地域の文化財はその歴史を示すシンボルともいえます。

秋田県の「男鹿のナマハゲ」を含む全国の来訪神行事10件がユネスコの無形文化遺産に指定され、宮城県の「大崎耕土」がFAOの世界農業遺産に認定されるなど、東北地方を発信源とする文化財に関連した記事が話題となっており、ユネスコの世界文化遺産登録を現在目指している三内丸山遺跡をはじめとした「北海道・北東北の縄文遺跡群」なども盛り上がりを見せています。

このように、東北地方には豊かな自然をはじめ、そこで育まれた特色ある伝統と文化があります。まさに東北地方は文化財の宝庫といえるでしょう。今こそ、自分たちの足元を見つめ直し、地域の歴史を語ろうではありませんか。



遺跡の発掘調査では、ただ現地調査が終われば済むというものではありません。発掘調査でのデータを蓄積し、地域研究を行うことでそれぞれの場所で生きた歴史が語られることとなります。また、知りえた成果を多くの人に知っていただくために伝えることも重要なことといえます。

(天童市・西沼田遺跡公園の「西沼田大学」にて)

私たちは、地域とともに歩む企業として

埋蔵文化財をはじめとした文化財に関わる様々な活動をお手伝いします。

それは、大地を読むことから始まる。



Construction Consultant

株式会社 三協技術

E-mail : sankyo @ sankyocc.jp

一業務内容一

- ・建設コンサルタント業
- ・測量業
- ・地質調査業
- ・補償コンサルタント業
- ・文化財調査
- ・不動産業
- ・数値解析
- ・環境調査
- ・下水道調査
- ・一級建築士事務所
- ・特定建設業
- ・宅地建物取引業
- ・労働者派遣事業

本社 / 〒980-0803

宮城県仙台市青葉区国分町3丁目8番14号

TEL : 022-224-5503 FAX : 022-224-5509

調査部 / 〒980-0011

宮城県仙台市青葉区上杉1丁目7番7号2階

TEL : 022-796-5816 FAX : 022-796-5826

文化財調査室 / 〒982-0003

宮城県仙台市太白区郡山5丁目19番15号

TEL : 022-748-0225 FAX : 022-748-0226

大崎支店 TEL : 0229-91-8465 FAX : 0229-91-8466

東京支店 TEL : 03-6276-1624 FAX : 03-6276-1625

盛岡支店 TEL : 019-681-7483 FAX : 019-681-7484

福島支店 TEL : 024-973-8681 FAX : 024-973-8682

山形支店 TEL : 023-665-5735 FAX : 023-665-5736

北関東支店 TEL : 028-611-3432 FAX : 028-611-3454

青森営業所 TEL : 017-718-0911 FAX : 017-718-0912

秋田営業所 TEL : 018-883-3910 FAX : 018-883-3911

石巻営業所 TEL : 0225-21-5563 FAX : 0225-21-5565

気仙沼営業所 TEL : 0226-25-9098 FAX : 0226-25-9108

福島営業所 TEL : 024-572-7370 FAX : 024-572-7371

栗原営業所 TEL : 0228-24-7921 FAX : 0228-24-7922